

新教育課程における語彙指導に関する研究

－学習者の語彙体系を分析することを通して－

A Study on Vocabulary Guidance in the new Curriculum

－Through Analyzing Learner's Vocabulary System－

中 島 賢 介

要旨

2017（平成29）年改訂された小学校学習指導要領には、低学年の語彙の量と質の違いが学力差を生むといった指摘を受けて語彙指導の充実が図られている。そこで、文化審議会国語問題小委員会などで協議されている内容などを吟味し、基本となる語彙の成立経緯や内容を踏まえた上で、H小学校における語彙指導への試行事業について検証する。その結果、児童から学校独自の教育内容が反映された語句が多く見られた。この試行事業を通して、今後の語彙指導の課題を明確にした。

キーワード：語彙指導（Vocabulary Guidance）／教育課程（Curriculum）／
学習指導要領（Course of Study）

I はじめに

2017年3月に告示された学習指導要領において、教科の枠組みを越えてすべての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力について、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱で一貫する方向で構成していることは既に周知の事実である。この構成にあたっては、2008年中央教育審議会（以下、中教審）答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」をはじめとして、2013年6月の第2期教育振興基本計画などの受け継がれながら検討を重ねてきた経緯がある。国立教育政策研究所などでこうした資質・能力についての理論が整理され、国内外の諸研究の成果に基づいて構築されている。

しかし、肝心の学習指導要領を改訂している作業の中で行われた論点整理の中には、明確なエビ

デンスが示されない、いわば経験則だけで主張されているような意見が見受けられる。本論では、国語科における語彙指導における課題を指摘し、H小学校における語彙指導のための試行事業を検証することで、今後の課題へのアプローチについて考察する。

II 語彙力が求められる背景について

いずれの学問分野においても、科学的手法を用いて、明確な論拠の下で理論が構築されるべきことは周知の事実である。しかし、教育の課題においては、しばしば科学的手法が通用しない議論が行われている。中室（2015）は、少人数学級や教員研修などの諸課題が信頼できるデータや分析に基づくエビデンスが示されていないという点を繰り返し指摘している。

いまだに日本では、教育という重要な分野において国際水準から著しくかけ離れた議論が行われてしまっています。今後は、日本も海外のように、効果測定によるエビデンスに

NAKAJIMA, Kensuke

北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科
主要担当科目 国語

基づいて教育政策のあり方を議論していくべきでしょう。(p.113) (下線は論者)

今回取り上げる2017(平成29)年改訂学習指導要領国語科における語彙指導についても、同様な現象が起きている。中教審「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」において、次なる指摘がなされている。

小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあり、そこで現れた学力差がその後の学力差の拡大に大きく影響していることが指摘されている。また、考えを形成し深める力を身に付ける上で、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにする必要があることが指摘されている。

しかし、日本国語教育学会が監修する『シリーズ国語授業づくり 語彙 言葉を広げる』では、編集責任者である今村は次のように述べている。

「指摘されている」を重ねてまとめられています。そこで、誰が、どんな指摘をしているかは示されていません。実際、教育心理学の分野において、海外に「読書量、語彙力、文章理解力」の関係について先行研究がわずかに見られる程度で、「学力」との相関関係について日本で経年調査が行われ、そのデータがあるのかどうかについては、残念ですが確認できませんでした。(p.9)

(下線は論者)

今村は、この後、「教員に限らずあちこちで聞かれることは事実」として、語彙力を育てる必要性を説いているが、何となくわかるということで語彙力について教育できるとは考えにくい。文化庁文化審議会国語分科会国語課題小委員会などの審議の経緯についても同様のことが言える。

言葉そのものの力は、コミュニケーションそのものよりも、コミュニケーションするための基礎力であると感じられる。その中でも、最も基礎的なものは、語彙力ということになる。日本人がコミュニケーションを円滑に行うために最低限必要な基礎語彙表のようなものを作るということもあるかと思う。(下線は論者)¹

ちなみに、この基礎語彙については、国語科における学習基本語彙の研究が一定の成果を上げて

おり、国立国語研究所(以下、国語研)においてもコーパスを用いた語彙研究などが進められている。こうした語彙を枠組みとして捉える考え方については後述することとする。

伝え合いにおいて、相手に配慮した表現を選択し、必要な言い換えを行うことができるようにするためには、語彙力が必要である。特に若い世代では、語彙の量とともに質を高める必要がある。語彙は体系的に習得されることが望ましいが、現代においては、たくさんの情報を受け取る機会があるものの、繰り返し読み直し、深く理解につながっているわけではない。漢字の言葉の意味は、手元の情報機器によって簡単に調べられるが、それらを分類、整理し、身に付けることが課題になっている。(下線は論者)²

この主張では、成熟した世代が分類、整理し、身に付けているということが前提になっている。この記述が、世代間の語彙量や語彙力の調査に基づいて主張されているかどうかは不明である。

ただ多くの言葉を知っていればいいというものではない。必要となる言葉は、人によってそれぞれ異なる。従事する仕事や研究、趣味、家事など、それぞれの分野で求められる語彙に精通し、それらを十分に使いこなすことが求められる。専門とする事柄によっては外来語や外国語などの片仮名語や難しい感じによる語など、多くの人にとってなじみの薄い言葉を身に付けることが必要となる場合もある。また、自分の持っている専門的な知識を、より分かりやすく説明するため、一般にも広く通じる言葉を置き換えることのできる選択の幅を持つておくことも望まれる。³

(下線は論者)

この主張では、語彙量だけでなく、それぞれ分野にふさわしい専門用語を精通して使用する必要性などが述べられている。語彙に関する文章であるにも関わらず、抽象的な表現のみで構成されている。

ちなみに、以上に見られる議論は、語彙そのものを論じたものではなく、より円滑なコミュニケーションに関して論じたものである。それゆえ、ここで重要となるのは「置き換えとしての語彙力」

であるということができる。教育の場だけに留まるのではなく、社会人としてビジネスなどさまざまな場面において語彙に関する課題が取り上げられているという背景がある。

総じて、こうした語彙に関する議論が繰り返されるということは、語彙そのものへの関心が高い、あるいは語彙力向上に向けて期待する声が上がっていることは事実であろう。しかし、それらはいずれも明確なエビデンスを持っていない、あるいは研究成果を認識していない声であるということが分かる。

Ⅲ 基本語彙というフレームワーク

先述したように、「基礎語彙表のようなものを作る」についてはすでに基本語彙というフレームワークの考え方に基づいて一定の成果を収めている。しかし、基本語彙という概念そのものが定着しないまま、語彙指導が行われてきたことも事実である。このことについて、解説すると以下のようになる。

まずは、教育基本語彙については、島村(2004)によると、1950年代に坂本一郎『教育基本語彙』や田中久直『学習基本語彙』、池原植雄『国語教育のための基本語体系』といった研究者が小中学校で学ぶ語句を調査して基本語彙に関する成果を相次いで発表している。その後1962年に児童言語研究会が『言語要素指導』、1984年に中央教育研究所が『学習基本語彙』、1984年に国語研が『日本語教育のための基本語彙調査』を発表している。2001年に、国語研がこれらの成果をまとめて『教育基本語彙データベース』（総数27,234語）を作成し、2009年には『教育基本語彙の基本研究：増補改訂版』を発表している。

これまで議論されてきた語彙については、次のように分類している。

〈基本語彙〉

統計的に解明した基幹語彙などをもとに特定の目的に役立てるための語彙の選定

基本語彙については国語研が1964年に出版し、2004年に増補改訂版が出版された『分類語彙表』がある。101,070語が収録されている。

〈基礎語彙〉

日本語教育を推進するための指導内容の中核語

彙の選定

基礎語彙については、先述した国語研『日本語教育のための基本語彙調査』が該当するものと思われる。

〈教育基本語彙〉

学校教育制度における指導内容の参考となる語彙の選定

〈学習基本語彙〉

学習者の側に立った語彙指導を推進する指導内容の参考となる語彙の選定

学習基本語彙については、宮腰(1998)の著作巻末に「主要学習語彙索引」にまとめられている。

〈国語科学学習基本語彙〉

各教科における指導内容の参考となる語彙の選定

国語科学学習基本語彙についての考え方については、井上(2001)がこれまでの語彙力の発達研究課題を明らかにし、学習基本語彙研究の歴史・構想をまとめた上で、国語科学学習基本語彙の選定を行っている。

以上のように、語彙のフレームワークは日常生活に必要な範囲から教育、延いては国語科に必要な範囲まで揃っており、年代経過とともに増補改訂まで施されているということが分かった。加えて古文書から現代の話し言葉まで各種の語句がデータベース化され言語学・文学・教育学の研究に活用されている。ただし、学習基本語彙や国語科学学習基本語彙については、学習者側の立場から製作されているとはいえ、製作者はあくまでも教育者研究者であるため、学習者である子ども一人ひとりが作製した語彙ではない。また、情報化社会と言われる前であっても年代が経過すれば増補改訂しているということは、日々刻々と情報量が増大の一途を辿る現代社会に対して、果たしてこうした基本語彙が耐えうるかどうかは疑問であると言わざるを得ない。前項での指摘にあるように、若い世代が多く情報を得ることができても、それらを分類、整理し、身に付けるためには、すでに教育研究者が製作した語彙表のように分類、整理されているものを提示することが必要ではなく、学習者自らが自分で得た語句を自分なりに分類し、整理し、身に付けていくことができるよう促すことが必要である。自分なりの分類、整理して表現

することができるようになることが、将来それぞれの専門分野において語彙力を高めるための基礎力になると考えられる。

IV 小学校・中学校学習指導要領における語彙

－国語科の場合－

先述した小学校学習指導要領では「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある」という指摘から、語彙を豊かにする事項が2点盛り込まれている。一つは語句の量を増すことに関する事項、もう一つは語句のまとまりや関係、構成や変化などに関する事項である。語句の量を増すことについては、第1学年及び第2学年では「身近なことを表す語句」、第3学年及び第4学年では「様子や行動、気持ちや性格を表す語句」、第5学年及び第6学年では「思考に関わる語句」の量を増すこととしている。語句のまとまりや関係については、第1学年及び第2学年では「意味による語句のまとまり」、第3学年及び第4学年では「性格や役割による語句のまとまり」、第5学年及び第6学年では「語句と語句との関係、語句の構成や変化についての理解」「語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使う」が挙げられている。

さらに中学校学習指導要領では、第1学年が「事象と行為、心情を表す語句の量を増やす」第2学年が「抽象的な概念を表す語句の量を増す」第3学年が「理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し」といった形で語彙を増やし、「辞書的な意味と文脈上の意味の関係」「類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句など」「慣用句や四字熟語など」の理解を深めて、話や文章の中で使い、和語、漢語、外来語などを使い分けながら語感を磨き語彙を豊かにするとされている。

V 語彙指導について

『国語教育研究大辞典』によれば、語彙力は「知識力」「理解力」「表現力」の3点を挙げているが、先述した『語彙』によれば、「知識力」「語彙量」「言語感覚」「言語操作力」の4点にまとめられるという。また、語彙指導においては、まず語彙の質的な拡充が求められる。語彙には、理解語彙と

使用語彙があり、理解語彙は言葉を理解できる量、使用語彙は実際に使用できる語彙を指す。一般成人の日常生活において使用語彙は3,000語程度とされていることに対して、理解言語は小学校入学時で6,000語、小学校卒業時には20,000語、中学卒業時には30,000語、一般成人には20,000語から50,000語を保有されるとしている。すなわち、実際に使用する語彙は千語単位でよいが、相手によりの確に言語によって伝達を図ろうとすれば万単位の語句が必要ということである。小学校では、児童の発達段階に応じて確実に身に付けるため系統的な指導が求められる。

国語科における語彙指導は、語句の関係性や語彙体系を理解させること、いわゆる取り立て指導と、文章中の難解語、難読語に焦点を当てて辞書を用いて調べさせる、いわゆる取り上げ指導が併用されている。先述した「語彙」の事項に示された語句だけを扱うということではなく、示された語句を重点的に扱いながら、多様な語句を学んでいくことが大切であるとされている。子どもが既有知識を賦活するために「意味マップ」を作成して、すでに獲得している言葉を「確認すること」と「喚起すること」を意識しながら新しい語の獲得や認識の変容を促すといったことも行われている。⁴

VI H小学校の試行事業から

H小学校は、北陸三県で唯一のキリスト教教育を実践している私立小学校である。H小学校の教育は、「毎日の礼拝を重んじ、聖書の学び・宗教行事・日常生活の指導を通して心を育む」「一人ひとりの個性を大切にし、豊かな人間性を培い、目標にむかってやりぬく子どもを育てる」「児童一人ひとりの理解に努め、児童の個性に応じたきめ細やかな指導を行う」という教育方針の下、「自然という舞台の上で 勉強+この力」という基本方針を掲げている。2014年度にキリスト教全体指導計画を策定し、現在は全体指導計画を改訂させながら新教育課程に向けて教科横断的な取り組みをさまざま取り入れ今日に至っている。具体的には、キリスト教教育（礼拝、聖書科の授業など）基礎学力（書く力、聞く話す力、計算力）、国際理解教育（オーストラリア姉妹校との交流、スカ

イプを活用した授業、ORTを活用した授業など)、環境教育(自然豊かな立地条件を生かした四季の草花観察、いしかわ版学校版環境ISOなど)、幼小連携活動(「この力」)、キャリア教育(「これからの力」)などの独自の活動を展開している。

2016年度から2018年度には、教員研修目標を「表現する子を育てる」とし、言葉や表情、動作などで自分の思いを自分の言葉で表現する子どもを育てる授業を目指している。「表現する子」すなわち表現の主体となる児童一人一人は日々の学びの中で、どのような言葉を獲得し、語彙力を高めようとしているか。このことを確認するために、論者が提案して、2017年度後期から2018年度前期まで、以下の試行事業に取り組むことを決定した。

「みつけたわーどお〜?!」の試み

〔試行目的〕

本校は私立小学校として独自の教育方針の下、児童の個性を尊重した教育活動を展開している。こうした環境下で児童はいかなる言葉に反応し、書き留めておこうとするかを調査する。なお、児童には、気になった言葉を単語帳に書き留めることで意味を調べたり、例文を考えたり、さまざまな場面で使用することができるようにする。

〔試行期間〕

2017年度後期(10月)～2018年度前期(7月)

登校時(8時25分)～下校時(15時20分)

〔試行場所〕

H小学校各教室(各学年1クラス)6クラス

〔試行対象〕

H小学校 95名(2018年7月時点)

〔試行方法・手順〕

- ① 児童に一人1冊大きめ(縦55mm横90mm)を配布する
- ② 児童には、「学校生活の中で気になった言葉を記入してください」と指示する。
- ③ 記入は強制せず、時折「気になった言葉があったら『みつけたわーどお〜?!』に記入してください」と促す程度にする。
- ④ 記入された単語帳を回収し、分析する。

〔期待される効果〕

- ・児童は、気になった言葉を気になった時に単語帳に書き留めることで、自分で意味を調べたり、例文を考えたりすることができるようになる。

- ・気になった言葉について考えを巡らせることで、語句を理解するだけでなく、その語句を使用して、理解語彙と使用語彙の差を縮小させることができる。
- ・言葉は国語科で学ぶものという意識を持つのではなく、家庭生活を含めて学習活動全般で学ぶものであるという意識を持つことができる。
- ・教師が単語帳を回収し点検することで、児童一人ひとりの児童理解(興味関心、特性、学びの指向性など)に役立つ。
- ・本校の教育活動について、児童が何に、どのような理解を示しているかを点検することができる。

〔留意事項〕

- ・今回は試行事業であるため、記入された語句の量的な分析をするのではなく、質的な分析のみを行うこととする。
- ・教師は児童に単語帳への記入を強制するのではなく、気になった言葉であれば何を記入してもよい、気になった言葉の意味などを調べてもよいこととする。

〔試行結果〕

試行当初は全学年を対象にしていたが、2017年度卒業生からは回収することができなかった。また、2018年度入学生には配布されていなかったことが判明し、実質2018年度2年生から6年生までの5クラスからの回収に留まった。単語帳への記入は強制ではないため、一語も記入していない児童もいれば、配布された枚数では足りず追加を要求してきた児童も見られた。教師にも点検方法については明確にしていなかったため、赤くアドバイスや感想を記入した教師もいれば、ただ配布回収のみを行った教師も見られた。

高学年は、辞書を引く習慣がついているため、表面に語句を裏面に意味や例文などを書くという一定の利活用をしていることが分かった。工夫された例としては、教師側から指示されていなかったにも関わらず、気になった言葉を記入した日付や、どの授業・活動で気になったかを自ら分類・整理しているものがあった。予想通り、授業で学習した語句に重複が多く見られた一方、読書活動などで気になった言葉などを記入しているため、多岐に渡っていることも分かった。仮想通貨の名

称や経済・医学などの専門用語など、自主学習の一環として活用している児童もいれば、担任が特別活動などに黒板に書いた言葉に気になった児童もいた。一方、低学年には、「気になる言葉」の意味が分からないこともあり、予想以上に多様な語句や利活用の方法が見られた。

以下に、国語科の授業で学んだ語句（外来語、慣用句、四字熟語、俳句、詩など）ではないものを紹介する。

〔語句の種類〕

① キリスト教教育に関連するもの（礼拝、聖書科の授業など）

「かみさま」「たまもの（賜物）」「たまものをいかす」「えいこう（栄光）」「かんしゃ（感謝）」「イースターの日は大じ ハレルヤ」「おのおの力はタラントンからきている」「ローマ12」「預言の言葉を朗読する人」「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先にいる マタイ19：30」「三位一体」「ハレルヤ 神をさん美する」「預言 ろうどく きく人 守る人 幸い」「神のみぞ知る」「イエス・キリスト」「受難」「盲人」「創世記」「ペンテコステ」

② 環境教育に関連するもの（生活科、四季の草花、「この力」など）

「ふきのとう」「だんご虫」「ばった」「ヨモギ」「あり」「ケムシ」「たんぼぼ」「テントウ」「わらび」「おどりこそう」「が」「くさ」「わらじ虫」「むらさきごけ」「つくし」「げっけいじゅ」「ミミズ」「カナヘビ」「トンボ」「かたつむり」「ECO」「ささぶえ」「すいば」「もくれん」

③ 国際理解教育に関するもの（英語など）

「スキー ski」「スキーヤー skier」「cloudy（裏に「くものえいご」）」「Precious すてきな あなたにはかちがある」（他にも自作の「英語カード」を提出した児童もいた）

④ 他の授業

「折れ線グラフ」「たされる数 たす数」「三重県 リアス式海岸」

⑤ 避難訓練（防災、防犯）、「心の授業」など

「ふしんしゃ」「ひじょう口」「ふわふわことば」「ちくちくことば」

⑥ 校歌

「森のみやこのこじょうのみなみ」

⑦ 文章（終わりの会でのコメント）

「〇〇さんにとけいをみつけてもらってうれしかった」

「△△さんと□□さんは大きなこえではっきりいってくれました」

「ごくろうさまでした」「けじめがついた ピッ!」

〔今後の課題〕

試行事業では、予想通り国語科で学ぶ語句、文章、意味といった記述が多く見られたが、教科・活動に関係なく、初めて出会う言葉の数々に興味関心を示していた。高学年になると、単語帳の使い方が定着しているのは確認できた。ただ、語句によっては裏面に意味が書かれていないものもあった。辞書に意味が載っていなかったためか、調べことをしなかったのかが判然としない。考えによっては、茂木（2013）が分析する「つまずきことば」であることも考えられる。教師による指導が必要な場合もある。

今回低学年においては、本校独自の教育活動に関する語彙が多く検出された。また、児童が思い思いに単語帳を自分の記憶媒体として、表現媒体として利活用していることが分かった。こうした児童たちが工夫して書き留めること自体には大いに意味があると思われる。本橋（2012）が指摘するように、低学年の国語教科書には他の学習も支える教科横断的な語彙がちりばめられていることも関係している。課題としては、これらに示された言葉について、今後はどのように使用語彙としていくかを検討する必要がある。具体的には、単語帳の言葉を使って意見を述べる、話し合う、日記や作文に表現するなど、次なる段階に接続させていくかが使用語彙として定着するカギであると考えられる。特に低学年は、原田（2018）の言及しているように、入門期におけることばの指導は、スタートアプローチカリキュラムの重要な位置を占めるため、この単語帳の活用は不可欠であろう。

先述した通り、児童の意欲に応じた単語帳作成の試行事業であったため、言葉として表現することに苦手な児童は、使用されない、使用されていても数語程度といった結果に終わっている。書くことに抵抗のある児童が、目にしたり耳にしたりする語句を書き留める習慣をつけることが、その

児童の語彙を増やす契機になると考えられる。教師が児童に共感したり、関心したりしたことを単語帳への記入を促したりすることで、書き留める習慣につながる可能性が出てくる。数語しか書くことのできなかつた児童にも、教師がその語句への思いを汲み取り感想などを伝えることで更に記入することへの意欲が高まる可能性がある。

更に、今回の結果から、各クラス担任や授業担当教師が児童一人ひとりの特性を理解した上で授業が展開できる。具体的には、今宮（2015）のように「教科のことば」を充実させるための学習を行ったり、語句の解説を行ったり、語句に関する話し合いを行ったりすることができる。

Ⅶ おわりに

語彙の問題については、矢部（2011）が指摘するように、語句・語彙の環境が流動的であるため、語彙調査の実現は困難である。また、語彙の指導においては、まずは困難ではあっても、客観的な資料に基づいて議論される必要がある。

今後は、H小学校の試行事業のように、小学校単位で語彙調査とその分析を行い、児童理解や学習状況を的確に把握しながら語彙指導を行う必要があると言える。H小学校には、試行事業で得られた資料に基づいて、小学校学習指導要領の方針通り、引き続き教科横断型の授業を推進し、幼保小、小中の連携接続にも配慮しながら児童の語彙形成に資する取り組みを続けていただきたい。

〈注釈〉

- ¹ 国語問題小委員会第2回（平成28年6月20日）に出された意見である。－明確な資料が提示されていない。
- ² 国語問題小委員会第13回資料（平成19年10月20日）
- ³ 「分かり合うための言語コミュニケーション」文化審議会国語分科会報告 平成30年3月2日
- ⁴ これらの記述は、『初等国語科教育』『小学校新学習指導要領ポイント整理 国語』の中で詳細に解説されている。

〈引用文献・参考文献〉

井上一郎（2001）『語彙力の発達とその育成－国語科学習基本語彙選定の視座から－』明治図書出版
今井むつみ（2013）『ことばの発達の謎を解く』ちくま

プリマー新書
今宮信吾（2015）「小学校における学習基本語彙の調査・研究 小学校6年間を支えることばの基礎・基本」『日本私学教育研究所紀要』第51巻 p.105-107
岡本夏木（1982）『子どもとことば』岩波新書
河内昭浩（2018）「小学校語彙指導の研究－説明的文章の学習における語彙指導－」『群馬大学教育学部紀要第67巻 p.35-46
国語教育研究所（1991）『国語教育研究大辞典』明治図書
国立教育政策研究所編（2016）『国研ライブラリー 資質・能力 [理論への]』東洋館出版社
島村直己（2004）「教育基本語彙データベースとその増補改訂作業」『全国大学国語教育学会発表要旨集』第106巻 p.65-68
千古利恵子・中條敦仁（2012）『語彙力を高める単語・語句学習のあり方』京都文教短期大学研究紀要第51巻 p.11-18
中室牧子（2015）『学力の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン
日本国語教育学会監修（2017）『シリーズ国語授業づくり 語彙－言葉を広げる－』東洋館出版社
原田大樹（2018）「小学校国語科におけることばの学習に関する基礎的研究－土田茂範の入門期の指導の場合－」『福岡女学院大学紀要人間関係学編』第19巻 p.83-90
堀畑正臣（2018）「小学校における語彙指導をめぐって」『国語国文研究と教育』第56巻 p.52-67
宮腰賢（1998）『子どもの語彙を豊かにする指導』国土社
茂木俊伸（2013）「小学校国語教科書における『つまずきことば』の分析」『鳴門教育大学研究紀要』第28巻 p.343-355
本橋幸康（2012）『『思考力・判断力・表現力』を育成する語彙指導の基礎的研究 小学校低学年における国語科教科書の分析から』『国語論集』第9巻 p.101-108
文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）』
矢部玲子（2011）「国語科教育における語句・語彙指導の現状と課題－小・中学校教師の意識と新学習指導要領から－」『藤女子大学紀要 第I部』第48巻 p.113-130
吉田武男監修塚田康彦・甲斐雄一郎・長田友紀編著

(2018) 『MINERUVA初めて学ぶ教科教育①初等国語
科教育』 ミネルヴァ書房

吉田裕久・水戸部修治編著 (2017) 『平成29年度版小学
校学習指導要領ポイント総整理 国語』 東洋館出版社

ホームページ

コーパス 国立国語研究所

(2018年10月8日検索)

<https://www.ninjal.ac.jp/database/type/corpora/>

文化庁文化審議会国語分科会国語課題小委員会

(2018年10月8日検索)

[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/
kokugo_kadai/](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo_kadai/)